「おさしづ」第３巻における「真柱・家族」と「道」

おやさと研究所講師
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第３巻（明治 26 ～ 28 年）にある「真柱・家族」の「おさしづ」における「道」の用例を整理する。ここで「真柱・家族」と分類しているのは、中山眞之亮初代真柱および中山たまへ夫人に関する伺いの「おさしづ」である。第３巻には「真柱・家族」の「おさしづ」は 25 件あり、そのうち「道」が用いられるのは 11 件、３回以上「道」が用いられるのは８件である。

「道」の用例と身上伺い

「道」が３回以上用いられている「おさしづ」は、一つを除いてすべて初代真柱あるいは夫人の身上について伺った「おさしづ」である。「真柱･家族」の「おさしづ」には、そのほかに、建物の普請や、初代真柱の出張に関する願いや伺いがあるが、そこでは「道」という言葉は用いられていない。そうした「おさしづ」は、端的に手短に許されることが多い。

その一方で、身上伺いの「おさしづ」においては、単に初代真柱・夫人の個人の事柄としてではなく、教祖の教えに連なる者のあり方、治め方といった事柄が主題となっている。そうしたなかで、「道」という言葉が用いられ論されている。

「海も越し山も越し、ろくぢの道を付ける」

３回以上「道」が用いられる「おさしづ」のうち、唯一身上伺いではない「おさしづ」では次のように言われている。

> 「一寸には行くやない。一寸に行くようでは一寸の道と言う。だん〳〵海も越し山も越し、ろくぢの道を付けるは、一寸には行かん。」（さ 26・１・21　中山会長外四名東京より御帰り下されしに付事情の御願）

これは、ある申し出があって、明治 25 年 12 月末頃から一派独立請願のため上京したものの、まったくの見込みなく帰ってきたときの「おさしづ」である。そこで、落胆して帰ってきたであろう一行に対して、「一寸に行くようでは一寸の道」に過ぎないが、神は「海も越し山も越し、ろくぢの道」を付けようとしているのであるから、そう簡単にいくものではない、と激励されている。ここで「ろくぢの道を付ける」と説かれているが、これは単純に一派独立のことをさしているわけではないであろう。下で取りあげる内々の人々の治め方という事柄と考え合わせると、初代真柱に向けた「おさしづ」においてこうした言葉で説かれているのは示唆的である。

この目指す「道」に対して「今の道」については次のように言われる。

> 「近き所雨風も厭わず、ばら〳〵〳〵立ち越して話し合い、この道何年前であろう。……何もこれどんな理道今の道、是非々々の道通りて居る〳〵。成らんから放って置いては分からん。分からねば、それで〳〵は折角艱難苦労の道失うて了う。そこで、これまでと道の件（くだ）ん変わりて通りてある。」（さ 27・1・1　教長歯痛に付御願）

このように「今の道」は、雨風も厭わずばらばらに立ち寄って話し合った、明治 21 年の教会本部設置にはじまるとされる。そこから、各地に教会もでき、教勢は盛んになっていたものの、このままでは教祖が通られた「艱難苦労の道」を失ってしまう、「道の件ん変わりて通りてある」と戒められている。

「所々道開けたる。これ一つ台として…」

特に、明治 28 年５月の初代真柱の身上を台とした一連の「おさしづ」では、「内々」の人々、「この道」に連なる人々同士の治め方について諭されている。

> 「内々もよう聞き分け〳〵。よう定めてくれ〳〵。定めるというはどんな道、神と言う言う。定めるならよう聞き分け。……さあ〳〵万事神一条の道という理を治めてくれ。」（さ 28・５・13　教長御身上願）

この「おさしづ」では、「内々」の人々に対して、「神一条の道という理」を治めるように諭されている。このように、初代真柱個人の問題だけではなく、その周りにいる人々の心の治め方について「道」を用いて説かれている。後に続く一連の「おさしづ」では、このことがさらに具体的に説かれる。

> 「ろっくな道なれど、勝手の理よりだん〳〵高低の理を拵え、あちらへこちらへ擦れ、心の理は散乱。たった一つの理を、兄弟一つの理、後より出けた理もあろまい。先へ出けたという理は無い。」（さ 28・５・13　教長御身上大変迫りしに付御願）

教えでは「ろっくな道」を説いているはずが、それぞれが勝手に「後より出けた」「先へ出けた」と「高低の理」を拵えて、それぞれの「心の理は散乱」している、と言われる。また、「道という道は大きい処も少ない処もない。」（さ 28・5・18　教長御身上今一段速やかならぬに付御願）とも言われる。これは、各地に数多くできた教会同士の関係に対する言葉だと思われ、その関係が親神の目から見ると、「ろっくな道」に沿わないところがあると戒められている。

しかし、今の教会は、後々の台となるべきものであると説かれる。

> 「この道という、元は細い道、所にどうという者も無し、今の処よう〳〵所々道開けたる。これ一つ台として拡めば、だん〳〵道と言う。……皆それ〳〵理の治まりたるは真実台と言う。よう聞き分け。これまで艱難の道を通したる。……世界国々それ〳〵多く道が付いて、一つ〳〵兄弟の元を拵え掛けたる。兄弟という理を聞き分け。人間という、元々一つの理より始めたる。兄弟なら兄弟という意味が無くばならん。なれど、中に兄弟心が合わん者もある。皆それ〳〵心より合わせてくれ。聞いたる者より合わせてやれ。」（さ 28・５・19　分支教会長一同帰部の上、教長御身上に付、本部員共に分支教会運び方将来心得事情願）

「この道」は元々「細い道」「艱難の道」を通って、ようやく国々所々に「道」が付きはじめたところである。その「道」に連なる者同士は、世界は皆「きょうだい」であるという「ろくぢの道」を広める「台」となるべきものである。したがって、お互いが親なる神の守護のもとにある「兄弟」として心を合わせるように、その代表者たる初代真柱の身上に事寄せて「神一条の道の理」の治め方が諭されている。